

浜松観光ボランティアガイドの会

2021年度「浜松観光ボランティアガイド養成講座」(後半)

令和4年2月7日(月) 前回に引き続き可美総合センターにて新人養成講座(後半4/5/6回)が始まりました。

【第4回・2月7日】

研修部員岩城豊さんが「戦国合戦の舞台裏(雑兵物語)」をテーマに講義をしました。

雑兵(ぞうひょう)とは身分の低い最下級の兵のこと(足軽、傭兵、奉公人)で、例えば合戦で死ぬのは雑兵で1000人の死者が出た場合、侍はその内100人から150人程度、死者の多くは従軍した雑兵だったといわれています。さて、その陣中生活において、自前で用意した物、水分補給、携行食、装い、そして排泄は?寝る場所は?怪我の治療は?等々、画像のイラストを交えて面白可笑しく説明が進みました。

研修室の窓を開け換気をして15分の休憩後、研修部員の頼母木敬祐さんが「家康の散歩道」の講義をしました。昨年一新されたパンフレットとスライドを基に、浜松城とその城下町を巡る<城内・城下ルート>12カ所、三方ヶ原の戦いの地を巡る<合戦ルート>8カ所を説明しました。受講者は熱心に傾聴し早くも現地研修へといざなわれた様子でした。

【第5回・2月14日】

研修部員桶田忠正さんが「激動期の浜松城主・堀尾吉晴」をテーマに講義をしました。堀尾吉晴は1543年尾張国有力土豪堀尾泰晴の長男として生まれ、1611年松江城の完成を目前にして生涯を閉じた69年間には、秀吉から家康へと政権が移行する様々な事件に関わり、領国経営と戦陣に従軍、1590年に秀吉から家康の旧領遠州浜松12万石を拝領して遠江の浜松城主となり、この在城中の劇的な11年間は特筆すべきと熱く語りました。初陣から逝去までを年代順で著した7ページのレジメが分かりやすいと受講者からの声がありました。休憩後は、「浜松あれこれ」をテーマに<浜松モノ>について研修部員山達夫さんが農水産物、三大産業他、太陽光発電導入日本一であることを説明。<浜松ヒト>について研修部員藤田哲也さんが、人物年表を用いて山葉寅楠から古橋広之進まで16人について講義をしました。

【第6回・2月21日】

「観光ボランティアガイドの魅力と責務」と題して、事務局古本俊夫さんが<一期一会の出会いを大切に>をモットーにガイド活動のマナー、ルール等の留意点、さらに丁寧語、尊敬語、謙譲語の使い分け、浜松市観光と地域全般の学び方について8項目の講義をしました。

座学終了後、18名の入会希望者は制服のサイズ合わせをした後、配属先のブロック長から、活動の概要、今後の研修予定等々の説明を受け、新人養成講座を終わりました。



「戦国合戦の舞台裏」の講義



「激動期の浜松城主・堀尾吉晴」の講義



大村会長と受講者の皆さん

「子供向け浜松城リーフレット」が完成

昨年の夏、鈴木利雄副会長より、小学生向けの浜松城のリーフレットをつくりたいので、教員経験がある人に協力をしてほしいと依頼をいただきました。観光ガイド1年目の初心者ですので、ちゅうちょしましたが、自分たちの勉強にもなるし、私たちの経験が会の役に立てるならとお受けいたしました。

【1 学校教育での観光ボランティアガイドの位置付け】

私たちが子供の頃の浜松城は、お弁当を持っての楽しい遠足の目的地でした。しかし、現在では、小学6年生の社会科学習と関連付けた「総合的な学習の時間」（以下「総合学習」）という、新しい教育の学習活動の場となっていることが多いようです。

総合学習というのは、文科省的言い方をすれば「学校や地域の実情に応じて、子供が自分の課題を持って探求的に学習をすることで、学び方を身に付け、自らの生き方までも考える子供を育てよう」??という、なんとも壮大な目標を持った新科目です。実は、学校教育の中で浜松城と私たち観光ボランティアガイドは、「積極的に活用すべき地域教材・社会教育団体等」ということになっています。

【2 社会科学習とリーフレットの関わり】

小学6年の社会科では、「キリスト教の伝来、織田・豊臣の天下統一を手掛かりに、戦国の世が統一されたことを理解すること」「江戸幕府の始まり、参勤交代や鎖国などの幕府の政策、身分制を手掛かりに、武士による政治が安定したことを理解すること」などが関連する主な学習内容です。

ボランティアは、社会科を教えるわけではありませんし、総合学習は、教科の枠を超え子供個々の興味・関心と課題に沿っての探究活動です。その意味で、先輩ボランティアが活動中に子供たちから投げ掛けられた質問や疑問がそのまま子供たちの興味や課題だと考えました。リーフレットの記述は、一緒に編集して下さった副会長たちの経験を中心に、Q&A形式で統一しました。

【3 リーフレットの構成】

戦前は、歴代天皇の名前を覚えたといえます。紆余曲折を経て、現在の社会科での歴史は、事象としての流れだけでなく、歴史上の人物の業績も学習するようになりました。

浜松という地域特性、大河ドラマ「どうする家康」の放送決定もあり、今回のリーフレット作成では、浜松城の単なる変遷や特徴だけではなく、徳川家康という人物に焦点を当てて以下5段階構成で編集することにしました。

- ① 家康が浜松城主になる前の様子（～1569）
- ② 家康が城主だったころの様子（1570～1586）
- ③ 堀尾吉晴が城主になったころの浜松城と家康（1590～1600）
- ④ 江戸時代の浜松城と浜松城下の様子（1603～1868）
- ⑤ 明治以降の浜松城（1868～現在）

【おわりに】

CG作成会社への使用申請、市文化財課への協力依頼など、外部との交渉は全て副会長にお願いし、なんとか完成にこぎつけることができました。このリーフレットを活用することで、子供たちの興味・関心が高まり、浜松城や徳川家康に留まらず、地域・日本の歴史・文化についても深く学びきっかけとなれば幸いです。貴重な経験をさせていただいたことに改めて感謝申し上げます。



リーフレットの表紙



完成したリーフレットを持つ作成メンバー

令和3年度 観光関係優良従業員として表彰



優良従業員として表彰されたメンバー4人

2月21日(月)16時よりオークラクトシティホテル浜松3階チェルシーの間において(公財)浜松・浜名湖ツーリズムビューロー主催の「令和3年度観光関係優良従業員表彰式・講演会」が参加人数を関係者のみに絞り交流会もなしという形で開催されました。

今年度の浜松地域における観光の発展に貢献されたホテル関係(3件)、交通関係(2件)、菓子メーカー(1件)、パラグライダースクール(1件)、団体(1件)の8団体から16名が優良従業員として表彰されました。当会からは11期の4名で小柳津勇さん(東ブロック)、外山義孝さん(北ブロック)、頼母木敬祐さん(東ブロック)、柳本幸子(中ブロック)です。齊藤薫理事長より表彰状を受ける際には司会者から一人ひとりの功績を発表してくださいました。そして最後に全員での記念撮影となりました。

30分の休憩をはさみ次は講演会です。(公財)浜松市花みどり振興財団理事長・塚本こなみ氏の講演「感動をお渡しするために」がありました。日本初の女性樹木医であしかがフラワーパーク園長に就任し大藤の移植を成功させ、経営難の同パークを一年で黒字化させました。そして浜松フラワーパークの理事長としての招請を受けこの園をどこにもない皆さんに素晴らしい!!!と感動するものを作るということを目標としてきたとお話されていました。

講演の最後に不登校のお子さんの学校復帰を支援するためにフラワーパークにその場を提供するように何年も行政に働きかけて、最後は行政から依頼がくる形で今では実現している話がとても印象的でした。同世代であり同性の活躍しておられるフラワーパークの理事長の講演を直に拝聴できたことはとても元氣と勇気をいただきました。

広報部 柳本幸子(中ブロック)

会員の交流広場

雪国から素敵な浜松の地に感謝

入会して11年が経ちました。ガイドの腕はさっぱりですが、振り返ってみるとあっという間、実りの多い11年でした。

入会してすぐに広報部に入れていただき、8年ほど編集のお手伝いをしました。役目があると一歩踏み込んだという気がして、面白くもあり励みにもなりました。当時は施設でコピー機を借用してのモノクロ印刷で、会場移動もあり時間はかかりましたが、編集最終確認・印刷・折り込みと仲間と会話しながらの楽しい時間でもありました。

お城の当番、資料館の当番は歴史の深いところの説明がうまくできず緊張するばかりで、自分でも何を言っているのかわからないこともあり自省することも多々ありましたが、打ち解けて話せると思いがけない感激が生まれることもあり、「ずっとお友達でいましょう」とお客様と盛り上がったこともありました。

私は雪国生まれなので浜松へ来た頃は驚くことばかりでした。まず冬の気候の良さに目をみはり、次に住む人達の気持ちの明るさに心なやみました。誰かれと心やすく話しかけてくる人なつこさ、産業も豊富でよく働く人達。雪に悩まされることもなく、上京して職を探す必要もありません。多分この地には徳のようなものが備わっているのだと思います。

お城のガイドが始まったのは、この徳をキャッチして集った人達のお手柄だったと思います。レトロな法被姿は閑散としていたお城を彩りました。できれば、歩いても楽しめる城下町であって欲しいと思いますが、交通量の多い浜松の道を見ると歯がたちそうにありません。「のびゆく浜松、これも発展ゆえ、この地の味ですよ」とアナウンスさせていただいています。

南ブロック 吉岡良子

浜松城主の家紋 パート 6

黒餅に八鷹羽車紋

井上正経（19代） 正定（20代） 正甫（21代） 正春（24代） 正直（25代）



餅紋の中に八鷹羽(やつたかは)を入れて家紋に用いられています。

黒餅(くろもち)は石持(こくもち)とも読め、石高を増やせると重宝されました。鷹は勇猛果敢、知性の高さから武士に好まれ、鷹の羽は和弓の矢羽根の材料として重宝されたこともあり、武家の家紋として数多く使用されています。

信濃国井上村から三河に移住し、井上清秀が大須賀康高に仕えたことから徳川家の家臣となりました。清秀の三男井上正就(浜松藩井上家初代)は、母が徳川秀忠の乳母だった縁から秀忠の近侍となり、永井尚政、板倉重宗と共に「近侍の三臣」と呼ばれ、秀忠の信頼を受けて遠江国横須賀藩10代城主となります。その後、正就は嫡子の縁組のもつれから、豊島政次によって江戸城西の丸で殺害される(51才)。井上家はお咎めなしで幕末までに4人の老中を輩出しています。

井上家は浜松城主5人で累算82年と長きにわたり浜松藩を支配しました。繊維業や藩校・克明館(1846年)を設置し藩士の育成に力を注ぎ、明治維新へと至ります。25代・井上正直(まさなお)は最後の浜松城主となりました。

水野沢瀉(おもだか)紋 水野忠邦(22代) 忠精(23代)



水野氏の水野沢瀉紋は、水野氏が住んだ尾張国知多郡小川地方では、沢瀉が生い茂っていたことに由来すると伝えられます。葉の形が矢じりに似ていることもあって、「攻めても、守ってもよい」ということから勝ち草と呼ばれ、毛利氏も副紋にこの沢瀉紋(立ち沢瀉)を使用しています。

水野氏は徳川家康の母、於大の方の実家にあたり、桶狭間の戦い後に家康に仕えました。歴代城主の中で最も有名なものが、21代・井上正甫(まさもと)の後に浜松城主となった22代・水野忠邦(ただくに)です(任期1817~1845年)。忠邦は幕閣列席を望み、あえて財政的に不利な転封を願い出て、唐津から浜松に移りました。忠邦は老中となって天保の改革を主導し、同時に藩政でも藩財政の再建、藩士教育(藩校、経誼館開校)などに力を注ぎました。しかし天保の改革には失敗し、藩政改革にも成果を上げることができませんでした。

参考文献/「日本の家紋6000より」「知れば知るほど家紋」、浜松市図書館他
研修部 岩城 豊(南ブロック)

2月のガイド活動 《明るく楽しくやらまいか》

「浜松城」・「犀ヶ崖資料館」・「浜松まつり会館」にて、来場者にガイドを行っています。またこの3カ所の他に「浜松市観光インフォメーションセンター(浜松駅構内)」や「家康の散歩道」同行ガイド、各種イベントとタイアップしたガイドなど幅広く活動しています。

《浜松城》

団体ガイド活動はありません

《犀ヶ崖資料館》

団体ガイド活動はありません

《浜松まつり会館》

団体ガイド活動はありません

はままつ案内人会報 236号

編集・発行 浜松観光ボランティアガイドの会
〒430-0946 浜松市中区元城町100-2(浜松城内)
TEL&FAX 053-456-1303
メールアドレス mail@hama-svg.jp
ホームページ http://www.hama-svg.jp/

はままつ案内人

検索



出世大名 家康くん

出世法師 直虎ちゃん